



# 決戦下の淨瑠璃魂

樋口吾笑

大東亞戰爭は、日清日露兩戰役の比にあらず、世界に強大を誇る米英を對手とし、世界人類正義の爲めに暴政を撃滅し、眞の極樂淨土を建設せんとする日本帝國の雄叫びであり、淨瑠璃魂の實行であり、肇國精神の顯現である。

淨瑠璃魂の鍛錬は師匠に就き修行する事である。劍客の雄宮本武蔵は「千日の稽古を鍛とし萬日の稽古を錬とす」訓へてゐる。然れば文章を理解し、藝を磨くと共に、精神を鍛へ養ひ之れを實行に移すが正道の清進である。採點競争の如きは、嚴密に云へば淨瑠璃精神に反する一場の遊興三昧に過ぎず、今假りに之に附隨する諸費を算するに、大阪を中心とし、九州・東京邊の出演者は少くも百金を下らざるべく、多きは數百金を要するであらう、其の支途詳細に至りては口外するを耻辱とさへされてある、眞に遺憾に堪へない。

紳士ぢやから分限者ぢやからとて、決して忠兵衛の眞似を仕てはならぬ。吾等の尊敬する某斯道大家は開演場を素人宅とする事。口上廢止。箱屋全廢論。服裝改革論を強張

し、經費節約を計つたが（從來の三分一）甚だ要領を得て居る。

由來傳統や道理はあつても、淨瑠璃界現在的方式は時代に不適當の事が多い。如何に内容は充實して居るとも、又其の主旨は立派でも、若人と呼ばせざる力あり、若人の理解を得て其の歡迎を受けざるものは滅亡に終るや必せり。文豪近松巢林子が古淨瑠璃より國性爺に一足飛び、また曾根崎心中と世話淨瑠璃開拓に筆を入れて一世を驚倒せしめたるが如き、社會と共に進み來りて大東亞建設の時に方り元祿時代の語物を當てはめんとするは時代が之れを容さぬのである。豊竹古靱大夫は部下を率ゐて新淨瑠璃の作詞作曲を企劃し、文樂座主と相携へ、近松門左衛門と二代目義大夫の如く、刻苦奮勵、隱忍自重すべきであらう。昭和文藝の稔りたる立派な淨瑠璃を作り、自ら陣頭に立ち、一座有爲の大夫にも各相當の重要場を擔當せしめ、昭和淨瑠璃改革の大責任を遂行すべきである。作文は茅の浦浪六筆風が淨瑠璃に適し居ると思ふ、而して其の作曲は舊淨瑠璃の

曲風を去り、日本固有の勇壯且つ美妙なる新曲を施さねばならぬ。譯も分らぬ舊符に觸れて彌々わからぬものとせる從來の如きインチキ作曲は斷然排斥せねばならぬ。

それから大夫三味線の養成に就ては、新淨瑠璃にあらざれば人材は出て来ない。國性爺が名作でも、忠臣蔵が傑作でも、先代萩御殿、太功記尼崎、酒屋、長局いづれも結構な勿体ない語物なれど、文化の昭和とは動もすれば人情習慣が違ふ。忠義の立て方に無理がある。茲に道德も社會も人智も進歩が認められるのである。然るに天保以前の曲符を嚙り來り焼きついで恥ぢない現在の有様が、世に持斷さるべきや否は云はずとも知れた事である。吾等が尊敬する古靱師は必ずや吾等の願望を容れるに吝でない事を信じ、每興行是非一題の新作上演を期待する。

最後に人形に就いて一言する。人形の滅亡期は淨瑠璃よりも早いこと云ふ迄もなし、文樂座の古參桐竹門造丈は曰く「文樂の巡業が到る處大入滿員を續け居るも、これを以て直ちに淨瑠璃振興し得たりとは申されません、また人形が良いからとも斷じられない、善惡の論外に立てば、獨り古靱紋下ばかりで他に論するに足る者無し、三位一体といふ六ヶ敷綜合藝術の淨瑠璃操り芝居に、古名人を凌ぐ大器量、大手腕家がどの部局に居るか、私ごとき無學不仕附、禮儀も言葉も粗野で、如何に云ひ扱すものなるかさへ知ら

ざる野人が、文樂へ來てから四十年、物心ついて以來名人と敬畏され、獨歩の大家と一世に持斷され、其の時代を代表した名人は居たが、衣鉢を襲く人は出ない。人形では現在吉田榮三、吉田文五郎の二人だ、これとて古稀を超ゆる事いづれも四五歳、肩が腰が腕がと体の故障を訴へる計り一朝事ありし時、後を襲くべき者ありや。私は榮三、文五郎の二大家がやめたら人形はそれでお仕舞と思ふ、所謂三位一体の藝術に缺陷が生じて完全なる藝術とは言はれまい幸か不幸か吾々も因協會に入れて貰つたが、人形界に曙光が拜まれたか、何が企劃されたか、新に入り來るべき途が開かれたか、新規の計畫は古曲藝術には無用と門を鎖されたのではないか、如何なる理由を並べても右二大家を以て人形は閉幕するものと思はる、時勢に應ずる事の出来ない無能と新知識は代謝する、これが社會進化とやらの原則と某先生の御話を其の儘信じて居る。其の次には大夫さんの番が来る。三味線が最後に残るであらう云々……。

櫓下豊竹古靱師は語る「東京、名古屋、京都、神戸いたる所股賑ならざるはなく、文樂座のため淨瑠璃界のため大慶至極と申上る外はないが、仔細に之れを観察し、吟味検討し、將來を慮れば實に寒心に堪へません。大入滿員は嬉しいが單に上つらのみで決して淨瑠璃が聽客を引付けたのではない。世は戰捷景氣で笛を吹いても滿員。では失禮で

すが……有難いよりは寧ろ勿体ない感に打たれる、何でもお客様にお土産を差上げる工夫をせねばなりません、有形の物質的でなく無形の精神的資料、大東亞戦下に於ける義勇奉公、苛烈決戦に臨み乍らも、悠々迫らざる大國民の襟度は敵米英を吞吐する氣概を示さなくてはならぬ。この精神的淨瑠璃を傳播強調、國風を堅牢につくり上げて、君國に奉るてふ大任務を遂行する程の大夫が出て、三味線人形も共に三位一体となり盡瘁ありたいと念する次第。が何をいふても人物拂底を慨嘆せざるを得ぬ、緊禪一番精神修

## チヨボ問答

甲 君は淨瑠璃界のチヨボなるものを知つてゐるか。

乙 竊聞にしていまだその出典を知らぬ

甲 芝居の床で語る大夫をチヨボと稱するのだ、原則としてチヨボは節と地だけで詞は語らぬ、そして節と地は文樂の大夫と何ら異るところはないが、淨瑠璃界の異端者として文樂の大夫とは公然交際が出来ないことになつてゐる。

乙 それでなぜチヨボと稱するのだ。

甲 大夫なるものは最初高貴の御方より授けられた「官名」であるから、相當權威を有

養技藝鍛錬に奮進努力が肝心要めと思ひます。云々……  
斯くの如く決戦下の淨瑠璃は單に娛樂であつてはならぬ風教の模範となるべきもの、思想善導。平和親愛、凛として國民を指導する雄々敷き志操、文章、曲節みな新しき昭和の大文字、新曲符で、其の一句一節悉く淨瑠璃魂の具現でなくては、國民が受け入れぬ。大夫、三味線、人形にも相當の教育がなければならぬ。奮へよ、奮へ。終幕の下りぬ前に奮へ！

してゐる。然るにチヨボは大夫と絶縁した異端者だから、官名も職格もなく勝手に、「大夫」の名を冒用してゐるのだ。

「大夫」なる官名も本當は「たいふ」と呼ぶのだがそれが、音訛されて「たゆう」となつてゐる、然し語源の上からは、「たいふ」であらねばならぬ。

乙 そこでチヨボの出典は……。

甲 傳説によると、天保頃のこと、或師匠より破門された弟子の大夫が芝居の淨瑠璃語りとして出演した、然し「何々大夫」として番附に載せられることは師匠に對して憚りありとの良心から「大」の中に、を打つ

て「太」とし、爾來「太夫」の文字を用ひたのだ、即ちチヨボを打つたので後年芝居の床に出る淨瑠璃語りをチヨボと稱するのだ。

乙 だが今日の文樂座の番附を見ても、紋下以下一様に、を打つた「太夫」の文字を用ひてゐるのではないか。

甲 僕は常にこれを怪訝としてゐる、大夫連が何故番附の文字訂正を抗議しないのか、大夫連が職格を誇負するに餘りにも無關心ではないか、恐らくチヨボの出典を知るならば必らずや抗議するだらう。

乙 同感々々。